

衣食住遊

第一一回

きものの力、恐るべし

文 深井 晃子

Fukai Akiko

ふかいあきこ／服飾史研究家。京都服飾文化研究財団理事、名誉キュレーター。ファッションに関する展覧会を国内外で企画開催。主な企画展に「華麗な革命」展（1989年）、「モードのジヤポニスム」展（1994年）、「Future Beauty 日本ファッションの未来性」展（2012年）などがある。著書に「ジャポニスムインファッション」「ファッションから名画を読む」など。

NYのメトロポリタン美術館でKIMONO

展が開催されたのは2年ほど前。レクチャーに呼ばれた。驚いたことには、会場は800人も聴衆で埋め尽くされていた。通常、私関連の地味で、少し専門的な講演会にこれほどの聴衆者が集まることは、絶対にありえない。「きもの」の力、恐るべし！である。

私は、きものの欧米への影響について、過去から現状までを話した。お気づきかもしれないが、最近、国内だけでなく、国外でも、きものへの関心が高まり、ファッションにきもの繋がりやデザインや技法がたびたび登場する。伝統がどうにも古臭く感じられた時代から、今、振り子は反対方向に振れている。

きものが、西欧の人たちを虜にした時期は、過去に2回ある。最初は江戸時代、オランダ貿易で海外に渡ったきものが、男性のおしゃれな室内着として着られた時。フェルメールの絵に見える。

次が19世紀後半から20世紀初め。1854年、日本が開国すると、浮世絵をはじめ日本品は海外で人気となる。きものもその一つだった。ホイットスラーの絵画に登場し、パリ・モードにも影響していく。

多くの西欧の人がきものを目にしたのは、1867年のパリ万博だった。正式に参加した日本から、3人の日本人女性が派遣された。きもの姿の彼女たちは、特設された日本家屋で見物客たちにお茶の接待をして、大変な人気を博したという。この時、日本女性のきもの姿は、強いインパクトを与えた。この万博を見察した後の実業家、渋沢栄一は、日記に「蟻が群がるように」彼女たちを見



パリ万国博覧会（1867年）の様子。
「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース紙」
1867年11月16日号

ようと集まった見物客のことや、きものを買いたいという若い女性が大勢いたことを記している。現地の新聞に掲載されたイラストからも、彼が記した情景が彷彿される。

女性雑誌には、「日本風」と称するファッションが登場する。以後、きもの影響がパリ・モードに現われ、きものはモネやマネの絵に取り上げられた。やがて、欧米にはKIMONOという語が定着していく。この時の日本熱は、後にジャポニスムと呼ばれ、特に浮世絵が印象派の画家たちに啓示を与えたことはよく知られる。きものもまた、欧米の生活文化に興味深い影響を残した。

フランスやイギリスの美術館を調査した時、19世紀後半に海外に多くのきものが渡り、それが今も収蔵されているのを確認した。欧米は異国風というだけではなく、きもの高い美意識と品質を評価したのである。

それからずっと後、1980年代に三宅一生、川久保玲、山本耀司らによる日本のファッション・デザインがグローバルな評価を受ける。それは彼ら自身の優れた才能はもちろんだが、それを支えた連綿と受け継がれてきた日本のきもの文化の伝統、とりわけそこに携わった多くの無名の作り手たちの繊細な感性に対するものでもあった。

レクチャーの最後を、「きもの文化のレガシーは、日本の若いデザイナーたちに間違いなく受け継がれていく」と結んだ。その時の大きな拍手は「納得」と言ってくれたように思えた。